

「何で次良はん妾が褒められる様な事がおますかいな」

「さいな此家の常さんは男前は美し、愛嬌は美し淨瑠璃は巧いし節は美し聲は美し、何處の會が有つても當りの附かぬ事はなし、常さんは連中うちでの色男やと、世間で皆が彼れ是れ云ふてるのんが姐貴の耳に這入らん事はあるまいと」

「阿呆らしい何を云ふてゝやね次良はん」

「けども彼處の姐貴は豪いと云ふて褒めてたで、マア大抵の女は皆愀氣をするのに夫れに吉野屋の常貴とこの姐貴だけは感心や、世間で何んな風聞を聞いても少しも顔へも出さねば口にも出さず實に感心やと云ふてたで、私處の嬢はそんな縫物でもしてる時に外で亭主が浮氣でもしてると云ふ様な事でも聞いたたら人の物でも我が物でもそんな區別がつかん、すぐに引き裂いて了ふのに、夫れに聞いても知らぬ顔をしてるのは實に感心や、併し女と云ふ者は少しは愀氣をせんといかんで、女に愀氣の無いのんと山葵や辛しの利かんのは何とのう間が抜けていかんもんや、少しは姐貴愀氣をしいや、世間の人が阿呆やと云ふで、少しは愀氣をしいや」

「イエ次良はん、なにか今聞いてると何や宅の常はんに外で情婦でも出来てる様な云ひ方やしな」

「なにや外に情婦でも出来てる様な云ひ方やな、姐貴お前何も知らんのか、ア、そうか、併し姐貴何んな捌けた女でも此頃の常やんの行狀を見たら愀氣をせんとは居られんで、宅の嬢やつたら縫ふて

る着物をビイーと引裂いて仕舞ふで、けどもナア姐貴お前はそんな事をしいなや」

「そんなら何か、宅の常はんに情婦が出来たと云ふのんはそら何處の女や、次良はん貴郎知つてるのんなら妾に教へとんか」

「そーらおいでた」

「何がおいでたんや」

「こら此方の事や、お前處の常やんと稽古屋のお師匠はんとは夫れは、深い仲やで、連中で知らん者は無いと云ふのは、皆の前でも構はずにいちや／＼するので見て居られんね」

「エ、それほんまか次良はん、知らなんだ知らなんだあの稽古屋のお師匠はんとか、エ、腹の立つ」

「姐貴、茶碗も鉢も皿も此處へ持て來とこか皆破つて仕舞ひ」

「次良はんなんでやね」

「宅の兄貴は焼つアババババ」

「何を云ふてるのんや、そんな事とは知らんもんやさかいに斯うやつて會の時の用意にと何も宅に物が有り餘つて有るやなし、妾が一枚の着物でも宅の人に内緒でこしらへて會の日に着せて遣つたら喜ぶやろうと思ふて縫ふてるのに、夫れに人も有らうに稽古屋の師匠と好い仲やなんてあんまりや次良はん貴郎夫れ見てやつたんか」